

中学生に家族関係を考えさせる家庭科の授業研究 (1)

—— 技能教科からのイメージチェンジ ——

岡田 安恵*・入江 和夫

A Study on the Class of Home Economics Subject to Help Junior High School Students Think about Family Relation (1)

—— Image Change from Skill Subject ——

OKADA Yasue, IRIE Kazuo

(Received January 12, 2007)

キーワード：家庭科観、家族、家庭生活

はじめに

昭和22年に家庭科は家庭建設の教育として家族関係に重点が置き、男女が学ぶ教科として誕生した¹⁾。しかし、昭和33年の中学校学習指導要領²⁾以降家庭科は、「家族関係」の学習内容が消え、衣食住を中心とする女子のみの教科として、約30年間続いた。しかし、その間に、家庭生活を取り巻く環境は大きく変わった。それに対応するために平成元年の改訂³⁾で「家庭生活」の領域が新設され、男女がともに学ぶ教科へと変わった。さらに平成10年の改訂⁴⁾では、家庭の在り方や家族の人間関係などの内容を一層充実させ、「A生活の自立と衣食住」「B家族と家庭生活」の内容を関連づけて学習させるように明記されている。現行の小学校の学習指導要領もこの改善の方針を踏まえて改訂されている。

児童・生徒がもつ家庭科観は、これまでどのような授業を受けてきたかで決まる。では、今の小中学生は現行の学習指導要領に添った家庭科観を果たしてもっているだろうか。山口県内の小学6年生と中学3年生を対象にした「これまで習ってきた家庭科のイメージ」について、著者らの調査によれば、児童・生徒は家庭科を「食生活」「衣生活」ととらえ、依然として技能教科に偏ったイメージが多かった。著者(岡田)は現在中学校の家庭科を担当している。このことから中学生に学習指導要領に沿った家庭科を理解させなくてはならない。そのためには、各学年個々の学習内容に入る前に、自分たちの家庭科観の偏りを気づかせたい。

そこでここでは、「家庭科」とは衣食住生活の技能のみを学習する教科ではなく、「家族」についても学習する教科であることを生徒に理解させることを目標とした授業を行うことにした。このことをねらいとしたワークシートを作成し、これに従って授業を進めることにした。生徒の意識の変容を明確に示すために教師(T)と生徒(S)の会話形式で授業の様子を記載し、生徒が書いた自由記述を分析することで、この授業目標が達成されたか

*山口大学大学院教育学研究科

を確かめることにした。ここではこれらについて述べていく。

方法

- 1 対象生徒 宇部市立K中学校1年生(73名)、2年生(66名)、3年生(57名)
- 2 実践時期 1、2年生は2006年4月、3年生は2006年11月
- 3 指導計画

学習内容	時間	学習活動
わたしたちの家庭科観	1	山口県内の小中学生を対象に行ったアンケートの結果から、自分たちがどのような家庭科観をもっているかを知る。

4 TとSの会話形式

- ① TとSの応答によって授業は進行する。
- ② Tの発問に対し、Sの発言はワークシートに自分の考えを書くように支持してあるので記録として残り、これを本文中に示した。

5 評価方法

- ① Tの発問に対してワークシートに記入した内容の分析
- ② 授業後の感想プリントの自由記述の内容の分析

結果及び考察

(1) 指導案

- 1) 題材名 わたしたちの家庭科観
- 2) 本時の設定意図

よりよい家庭生活を送りたいと言う願いは、生徒の誰もがもっているものである。しかし、自分がそれを実現する主体者の一人であるという認識は、ほとんどもっていない。また、生徒の家庭科観は家事技能の習得に偏っている。家事の機械化・社会化によって生活保持技能の習得が家庭生活を送る上で不可欠なものではなくなっているため、家庭科を学習することの必要性を感じていない生徒もいる。

そこで、家庭科の学習を始める最初の時間である本時は、山口県内の小学6年生(中学3年生)を対象に行ったアンケートの結果(昨年度実施)から、自分たちが生活保持技能の習得に偏っている家庭科観をもっていることに気づかせたい。また、同じアンケート結果で、ニュースの中で気になることとして「家族関係に関すること」をとりあげた人が多いことに着目させ、自分たちが、家庭の精神的機能の低下に危機感を持っていること、よりよい家庭生活を実現したいと願っていることに気づかせたい。

教科書の目次が、2色で色分けされていることから、家庭科の学習内容には「A生活の自立と衣食住」と「B家族と家庭生活」の2つがあることに気づかせ、家庭科は、自分たちが危機感を持っている家族・家庭生活についても学ぶ教科であることをしっかりと認識させたい。

3) 主眼

自分たちの家庭科観が衣食住生活に偏っていること、自分たちが、家庭の精神的機能の低下に危機感を持っていることに気づかせるとともに、家庭科が家族・家庭生活についても考える教科であることを理解させる。

4) 準備物 学習プリント、感想プリント

5) 学習過程

階	学習内容	生徒の活動	支援上の留意点
課題の意識化	アンケート結果を知る。	アンケート結果から次のことを読み取る。	事前に行った小学校6年生を対象の「家庭生活や家庭科に関するアンケート」の結果を提示する。
	①家庭科の必要性	「家庭科を学習することをみんなはどう思っているのだろうか。」	家庭科が必要ないと考えている人がいることに着目させ、必要ないと思うのはなぜか、自分たちの家庭科観どのようなものをアンケートから読み取らせることによって考えさせる。
	②家庭科のイメージ	「家庭科ってどんなことを学習する教科だろう。」	家庭科の必要性について男女で意識に差があることに気づかせ、差が生じることを自分はどう思うか考えさせる。
	③家庭科で学びたいこと	「これから家庭科でどんなことを学習したいのだろうか。」「なぜ、衣食住に関することを学びたいのだろうか。」	家族の一員あるいは、将来新しい家庭生活を築く主体者になることを考えて、よりよい家庭生活を実現させるための手段として生活保持技能を習得することが重要であると考えていることに気づかせる。
	④家庭生活のニュースの中で気になること	「テレビなどで報道されている家庭生活のニュースで気になっていることはどんなことだろう。」	「家庭生活」について生活保持技能に関することよりも虐待など家族関係に関するニュースに関心を持っていることに気づかせる。
	家庭科の目標・内容	学習指導要領の家庭分野の目標と内容を知る。	自分たちが、家庭の精神的機能の低下に危機感を持っていることに気づかせる。
	家庭科の学習の柱の一つが「家族と家庭生活」であることに着目させ、自分たちが危機感を持っている家庭や家族について学習する教科であることに気づかせる。		
本時のまとめ	本時の学習内容のまとめや感想を友だちと話し合う。	あまり話したことがない人と2人組を事前に作らせておき、今日の授業でわかったことや感想を話し合わせ、話し合っただけ気づいたことをプリントにまとめさせる。	
まとめ	次時の学習内容	次時の学習内容と宿題についての説明を聞く	教科書の目次で家庭科の学習内容と各項目のページ数を調べさせ、直接的に「家庭・家族」について学習する時間数が少ないことに気づかせる。 また、家族の生活時間調べをさせ、家族が一緒に過ごしている時間をチェックさせることで日常生活の中で家族との触れ合いが充足しているかどうかを考えさせ、学習に対する課題意識をもたせる。

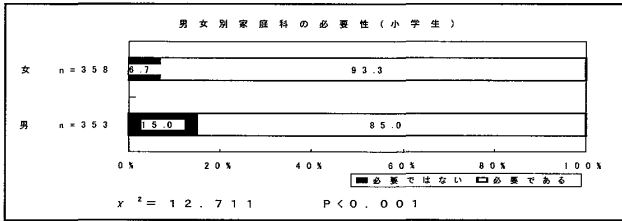
6) 評価

自分たちの家庭科観が衣食住生活に偏っていること、自分たちが、家庭の精神的機能の低下に危機感を持っていることに気づき、家庭科が家族・家庭生活についても考える教科であることを理解することができたか。

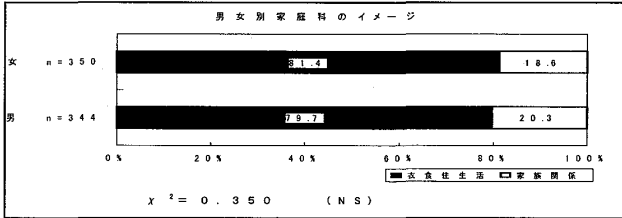
(2) 学習プリント

家庭科学習プリント No.1 家庭科ってどんな教科 (Part1)

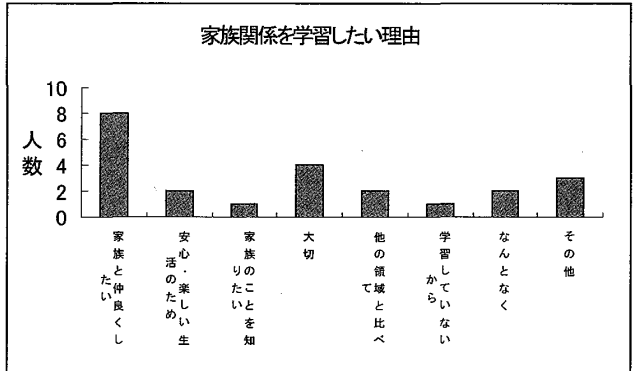
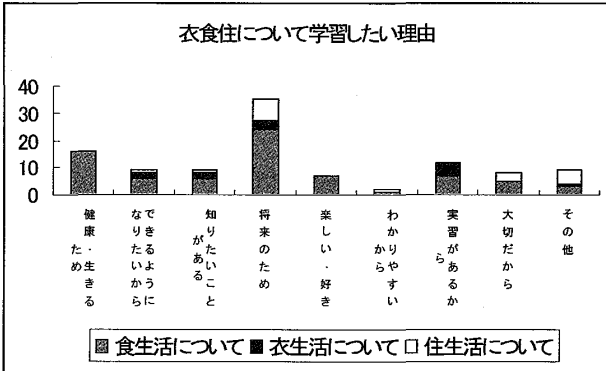
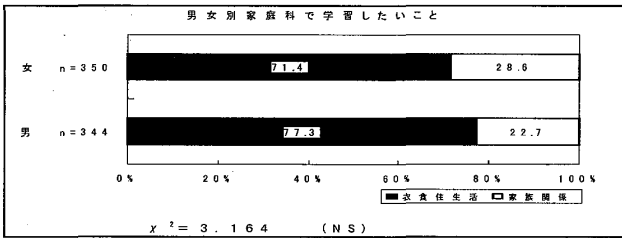
1. みんなは家庭科を学習することをどのように感じているだろうか。グラフを見て答えなさい。



2. みんなは、家庭科ってどんなことを学習する教科だと考えているだろう。グラフを見て答えなさい。



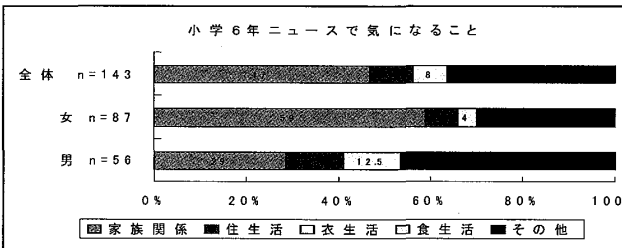
3. みんなは、これから家庭科でどんなことを学習したいと考えているだろう。グラフを見て答えなさい。



年 組 番 氏名

学びたい理由

4. みんなが家庭生活のニュースで気になっていることはどんなことだろう。グラフを見て答えなさい。



5. 家庭科の学習の2つの柱

(3) 授業内容

1) ワークシート1「みんなは家庭科を学習することをどのように感じているのだろうか」

生徒の主体的な学習を引き出すためには、生徒自身が家庭科を学習することの意義を見いだす学習過程を仕組む必要があると考えた。そこで、ワークシート1の「みんなは家庭科を学習することをどのように感じているのだろうか」について授業を行った。昨年のアンケート調査によって85%～92%の小学校6年生が家庭科を必要だと考えていた。この小学生は現在の中学1年生になっている。授業のはじめにまず、

T：「人間って、必要性を感じないと物事に一生懸命になれないよね。じゃあ、家庭科の授業をはじめの前に、なぜ、家庭科を学習しないといけないのかというところから考えてみよう。」「去年あなた達にもやってもらったアンケート結果がグラフで示してあるけど、家庭科を学習することをみんなはどう思っているのだろうか。」と投げかけた。

S：「男子も女子もほとんどの人が家庭科を必要であると考えている。」「男子より女子の方が家庭科を必要であると考えている生徒が多い。」

という発言があり、家庭科の必要性に男女差があることを気づいた。そこで

T：「男女差はあってもいいのだろうか。」と発問すると

男女差は「あってもよい」と答えた生徒が、男子82%、女子26%いた。その理由を聞いてみると

*男女差が「あってもよい」理由

「自分の家も家のことは、お母さんがやっているから」「世の中がそうなっているから」「嫌いだから」

*男女差が「あってはいけない」理由

「男女平等だから」「男も1人暮らしするとき困るから」

T：男女差を肯定する理由として母親が家事をするからという理由が多かったことから、まずその母親になる女子に「将来、自分の配偶者が家庭科を全く勉強していないから、家庭のことは全て任せた。と言われたらどう思う。」と聞くと、

S：「それは困る」「家のことは2人で相談してやっていきたい」と全員が答えた。

T：男子に「将来の配偶者になる女子だけが家庭のことを学習する機会が今まであったかな。そしてこれからもあるのだろうか。」と聞くと、

S：「学校での勉強は同じだと思う。」と答えた。

T：次に「女子は、大人になったら、自然に家庭のことがきちんとできるようになるのだろうか。」と聞くと、

S：口を揃えて全員が「そんなことはない。」と答えた。

T：男女にそれぞれ質問をした後「家庭科の必要性についての男女差があってもいいのか」と改めて聞いてみると、

S：女子は全員「あってはいけない」という意見に変わったが、男子は1年生が各クラス2～3人、2、3年生はクラスの約半数が「あってもよい」と答えた。その理由として、「頭では何となくわかったような気がするけど、やっぱり、家のことはおかあさんがやるから」と答えた。

T：「今年度の家庭科35時間かけてこの問題は、みんなで考えていこう。」となげか

けた。

このようにワークシート1の学習で生徒達は、これまで家庭科を学ぶ必要性を自分自身が感じているか深く考えてこなかったことに気づくとともに、男女差が生じていることを知った。そして、家庭建設は男女がともに協力してのぞむという視点から、男女別に家庭科に対する意識の差について考えさせたが、男女で意識の変容に差が出た。98.7%の女子と76.3%の男子が家庭科の必要性について男女差はあってはいけないという意見になった。

この男女差は、生徒が指摘しているように各家庭において家の仕事のほとんどを母親が行っているため、家庭科＝生活保持技能の習得、家庭科＝女子というイメージを生徒がもっていることから生じていると考えられる。

2) ワークシート2 「みんなは家庭科って、どんなことを学習する教科だと考えているのだろうか」

自分たちの家庭科観が生活保持技能の習得に偏っていることに気づかせるためにワークシートの問題2について授業を進めた。アンケート調査では小学校6年生の8割から9割が家庭科のイメージとは衣食住であると回答している。そこで、

T：「あなたが習ってきた家庭科とは、食生活、衣生活、住生活、家族関係のどのイメージが最も強いですか。」と聞いてみた。

S：80.3%生徒が、家庭科＝食生活、家庭科＝衣生活と答えた

*家庭科＝食生活の理由

「調理実習が楽しかったから」

*家庭科＝衣生活の理由

「6年生の半分くらいかかってエプロンを作ったから」

T：「山口県内小学6年生は、どういうイメージを家庭科にもっているでしょう。」

S：「衣食住生活が多い。」と答え、自分たちも家庭科＝衣食住生活というイメージをもっているの、それは当然であるにとらえているようであった。

T：「家庭科＝衣食住生活というイメージを持っている人がほとんどだね。」と確認した。

ワークシート2の学習によって生徒達は、自分たちの家庭科のイメージが衣食住生活に偏っていることに気づいた。

3) ワークシート3 「どんなことを学習したいと考えているのだろうか」

家庭科の学習内容を生活という視点から総合的に捉えさせ、「A生活の自立と衣食住生活」と「B家族と家庭生活」がリンクしていること気づかせるためにワークシート3について授業を進めた。これから学習したいことについてのアンケート調査では約8割が衣食住であった。

T：「あなたがこれから家庭科で学習したいことは、食生活、衣生活、住生活、家族関係のどれですか。」と聞いてみた。すると全員が食生活と答えた。

*これから学習したいこと＝食生活の理由

「将来、大人になって困らないように」「栄養のことが大切だから」「調理実習が楽しいから」

T：そこで、「将来のためという理由をあげた人は、将来の自分のことだけを考えているのだろうか。」と切り返してみると、

S：「家族のため」「自分と家族のため」と答えた。その意見を全員が支持した。

S：「あっ、そうか、みんな本当は、家族のために家庭科を勉強してたんだ。」と発言した。この発言によってクラス全体が生活保持技能を身に付けることと家族を関連づけて考えることができた。

T：「みんなは、家庭科を衣食住生活に関することを学習する教科だと考えていた人が多かったけど、家庭科って、家庭について学習する教科だよ。その家庭って家族が生活する場のことだね。衣食住生活に関する学習もよりよい家庭生活を築き、家族がしあわせに生活するために学習する必要があると気づいていたんだね。」と確認した。

このようにワークシート3の学習によって、家庭科の学習内容が相互に関連していることを生徒に気づかせることができた。

4) ワークシート4「みんなが家庭生活のニュースで気になっていることは何だろう」

自分たちがよりよい家族関係を築きたいと考えていることに気づかせ家族関係について学習する必要性を感じさせるためにワークシート4に授業を進めた。アンケート調査では約5割の小学生が家族関係のニュースが気がかりだと回答している。

T：「テレビなどで報道されている家庭生活のニュースで気になっていることはどんなことだろう。」と発問した。

S：「虐待」「親子間の殺人」をあげる生徒が多かった。

T：「なぜ、気になっているのだろう。」と理由を聞くと

S：「自分たちと年が近いから」「自分たちに同じことが起こったら嫌だから」と答えた。

このようにワークシート4の学習によって、家族間に起こっている事件に危機感をもっていること、自分たちがよりよい家族関係を築きたいと願っていることに気づかせることができた。

5) ワークシート5「家庭科の学習の2つの柱」

家庭科が、自分たちの生活に密着した内容を扱うことを確認させるためにワークシート5に授業を進めた。

T：「家庭科でこれからどんなことを学習するのだろうか。教科書の目次を見てみよう。」「目次の背景の色に注目してみよう。何色使われているかな。」と発問した。

S：「2色」と家庭科の学習内容が大きく2つに分けられることに気づいた。

T：「その2つは、どのように分けられているのかな」

S：「生活の自立と衣食住と家族と家庭生活の2つに分けられています」

T：「あなた達も含めて、中学生は家庭科＝衣食住生活と考えている人が多いけど、家庭科には、生活の自立と衣食住と家族と家庭生活の2つの柱があるんですね。」と確認すると

S：「家庭科は家族や自分のことで大事な教科だと思った。」「家庭科は家族のためなんだなと思いました。」「家庭科はほとんど衣食住と思っていた。よく考えたら衣食住も家族のためでした。わぁーすげーと思いました。」「家族についてあんまり考えたことなかったけど、これからのことをよく考えて家庭科に取り組みたいです。」「家庭科の授業は、わたしたちの未来につながっていることがわかった。」「家族のことがよくわかり、うれしかった。」

このようにワークシート5の学習によって「家族と家庭生活」が中学校の家庭科の学習の柱の一つであることを押さえることができた。また、家庭科の学習が自分たちの生活に密着する内容を総合的に扱うことに気づかせることができた。

(4) 本授業に関する生徒の自由記述

生徒はこの授業をどのようにとらえ、何を理解したのだろうか。このことを把握するために生徒の自由記述を以下に示した。

自由記述例

- a 家庭科の勉強はとても大切な教科だとわかった。家庭科のことを必要じゃないと思った人の意見を疑問に思った。
- b 家庭科の授業が私の未来につながっていることがわかった。
- c 女子の方が家庭科を大切だと思っていることや家庭科の授業は家族の役目についても勉強していくこともわかった。男女でなぜ差があるのかをもっと詳しく調べたい。
- d 男子が「男子にも家庭科の授業は役に立つ」といっていました。「男子もそう思っているんだな」と驚きました。
- e 家庭科はほとんどが衣食住だと思っていました。よく考えたら衣食住も家族につながっていました。家庭科の必要性で何で男子は少ないんだろうと思いました。
- f 家庭科は家族のことや将来のことで大事な教科だと思った。
- g 家庭科のことであまり深く考えたことがありませんでした。なので考えてみて家庭科の授業は全て家族のためにあるんだなあと思いました。
- h 協力し合って男女がともに家を守る責任があるんだと思いました。今の時代は男女とも同じ事を学習しているんだから、男女差をなくして男女がともに協力できる時代にしたいです。

a は、家庭科を学習する必要性を感じている。b、f は、家庭科の授業が、自分の将来の生活と大きく関わっていることに気づいた。c、f、g は、家庭科が家族について学ぶ教科であることに気づいた。d、e は、家庭科に対する意識の男女差に着目している。e、g は、家庭科＝衣食住生活と考えることに疑問をもつようになった。h は、家庭は男女が協力して守っていくものであることに気づいた。

生徒の反応から、本時の授業について全員が肯定的な感想を書いた。また、この中に「家族」を含めた記述があった生徒が91.9%いた。家庭科の学習の必要性および、これから始まる家庭科の学習のキーワードとして「家族」を含めることを理解させることができた。

このように自分たちが、家庭科をどのようにして考えているかを考える学習過程を仕組みることによって家庭科を「家族」についても学ぶ教科として認識させることができたと考えられる。

まとめ

衣食住の家庭科から家族を考える家庭科を目指して「家庭科ってどんな教科」を考えさせる授業を展開した。

今回、授業をまとめた。

- 1) 家庭科の必要性については、調査データについて考えさせたところ、“男女差があっ

てもよい”が、授業前、男子は82%、女子は26%いた。授業後には、男子23.7%、女子1.3%に減った。しかし、意識の変容に男女差があったことから今後の課題として、男子の意識を変えるための具体的手だての仕組みが必要があることがわかった。

- 2) 生徒の家庭科観については、授業前には、家庭科＝家族関係と答えた生徒は、19.7%で、家庭科と家族を結びつけて考えていた生徒は約2割だった。授業後の感想では「家族」についての記述があった生徒は91.9%に増加した。家庭科の学習と「家族」を結びつけて考えるようになった生徒が増えたことから、今回の授業は目標を達成した。
- 3) 本時の学習のねらいが、1)、2)より達成されたことから作成したワークシートは、教材効果があったと考えられる。

おわりに

今日の日本では、子どもの親殺し、親の子殺しや虐待など家族に関する事件が後を絶たない。1998年に中教審は「幼児期からの心の教育の在り方について」の答申¹⁾で家族のコミュニケーションの減少など家庭生活の質的变化を「ホテル家族」ということばで表現し、家族同士の意識的なネットワークづくりの必要性を切実な課題として指摘している。家庭科こそこれに答えるべき教科である。男女が共に家庭生活の意義を十分理解し、協力し合いよりよい家庭建設をするための能力と実践的な態度を育てることを目標とする教科だからである。この目標を達成するためには、まず、学習の主体者である生徒自身が、家庭科を「家族」を含めた教科として認識することが必要である。しかし、小中学生の家庭科に対するイメージは、衣食住生活に偏っていた。生徒の家庭科に対する意識改革を目的として今回使用したワークシートによって、生徒は、家庭科が単なる技能教科ではなく「家族」についても考える教科であることに気づいた。意識改革のスタートラインに立ったばかりである。次は、衣食住生活に関する知識や技術が、家族の精神的機能を高めるための具体的な手だてとして役立つこと認識させることができる教材開発をするなど、より一層授業改善を図る必要がある。

参考文献

- 1) 中学校学習指導要領（昭和22年）家庭科編（試案）－文部省
- 2) 中学校学習指導要領（昭和33年10月）解説－技術・家庭科－文部省
- 3) 中学校指導書（平成元年7月）技術・家庭編－文部省
- 4) 中学校学習指導要領（平成10年12月）解説－技術・家庭科－文部科学省
- 5) 中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について」答申第2章もう一度家族を見直そう

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/980601.htm#2